

# 漫才における「フリ」「ボケ」「ツッコミ」のダイナミズム

安 部 達 雄

## 1. はじめに

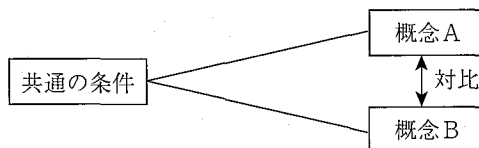
筆者は、表現主体が意図する「おかしみ」を言語的な側面においてどのように効果的に伝達しているのか、という過程に興味がある。笑いのテキストを扱って笑いの源泉がどこにあるのか、といった研究は現在まで少なからず存在するが、それら従来の研究には、「おかしみ」の対象（なにおかしみを感じたのか、というその対象）の構造的把握、という観点が欠けているように思われる<sup>(1)</sup>。「おかしみ」の対象の構造的把握と、さらにその構成要素の実現過程の検証なくして、「おかしみ」を感じる箇所が文脈的に作り上げられている過程を検証したことにはならない。

そこで本研究は、表現主体が意図した「おかしみ」が理解主体に伝達され、「笑い」という現象に結実することの多い漫才という話芸を扱って、従来の漫才用語である「フリ」「ボケ」「ツッコミ」という機能に注目し、「おかしみ」を伝達する過程を段階的に検証した。なかでも本稿は、安部（2004）、（2005a）、（2005b）で示された「フリ」「ボケ」「ツッコミ」の研究成果を援用して、実際に漫才本編のなかでそれらの言語操作がいかに有機的に作用しているのか、ということを考察する一応のまとめのような位置づけの研究である。

いま、ここでは「笑い」という用語の指示範囲が広くかつ曖昧なため、正確を期するために「おかしみ」という言葉を使用しているが、考察にはいる前に、まず本稿で扱う「おかしみ」という用語の定義を明記しておく必要がある。

「おかしみ」とは、「笑い」という「現象」を喚起する要因のひとつであり、「おかしみの笑い」とは、中村明（2002）の言う「認識した対象を解釈する過程を経て生じる笑い」である、という立場をとる。この際、おかしみの笑いの「対象」となるものは、「ズレ」理論（ショーペンハウエル（1972、原著1966））に依拠し、対象内に「異なる二つの概念の対比」の構造があるもの、と考える。構造的に「異なる二つの概念の対比」を有し、その対比が「異質である」と理解主体（笑う主体）が判断した場合、そこに「おかしみ」を感じる可能性がある<sup>(2)</sup>、というわけである。

したがって、ひとつの文脈に、まったく別の二つの概念が存立している構造、ここにおかしみを感じさせる可能性があるといえる。おかしみの構造を図<sup>(3)</sup>に示すと、以下のようになる。



これを「おかしみの構造図」（以下、「図」）と呼ぶことにする。

なお、本稿で扱う用例に関しては、実際に上演された漫才で、市販のものを用いる。これは知名度が高く、比較的多くの観客に受け入れられ続けている、という基準を設けたことによる。文字化にあたっては台本形式で筆記し、各用例の頭には演者と、必要な際は場面説明を付した。演者の発話には、発話者と発話番号を付し、用例は必要な部分のみを抜き出し引用した。

また、分析の観点は表現主体<sup>(4)</sup>寄りである。これはテキストに表出する言語的事実から表現主体の作為的な言語操作を読み取ろうとする立場からである。

## 2. 前提

### 2.1 「フリ」「ボケ」「ツッコミ」の概念

本研究の着目点である従来の漫才用語「フリ」「ボケ」「ツッコミ」<sup>(5)</sup>という概念は、未だ学術的には正確に定義されていないが、効果的におかしみを伝達する過程を段階的に把握できるものであると考える。本研究では、

「フリ」＝ボケの先行部分でおかしみを効果的に伝達する表現（主に共通の条件、概念Aを設定、導出<sup>(6)</sup>）

「ボケ」＝おかしみの図を完成させる表現<sup>(7)</sup>（主に概念Bを設定、導出）

「ツッコミ」＝ボケの後続部分でおかしみを効果的に伝達する表現（おかしみの図の存在を効果的に伝達する）

と定義して、考察を行った。本稿では言語的アプローチに限定して考察するので、諸表現はすなわち言語表現、言語操作と限定するものとする。

### 2.2 先行研究

表現主体が意図するおかしみを言語的な側面においてどのように効果的に伝達しているのか、という過程に注目した先行研究に、安部（2004）、（2005a）、（2005b）がある。これらの研究は本稿を展開する上で説明不可欠な部分であるので、多少紙面を割いて紹介することになるが、本稿を論じるうえで必要なものとしてご容赦いただきたい。

#### 2.2.1 安部（2004）「フリ」に関して

まず安部（2004）は、上述の漫才における「フリ」について考察したもので、「フリ」にはなにに

ついて話題を展開するののかという大きな話題提供をする「スジフリ」と、ある話題についてその内容を深化する働きをもった「マエフリ」の2種類があることを確認した。「スジフリ」はフレーム<sup>(8)</sup>を活性化させることで、「ボケ」の表現におけるおかしみの構造を導出しやすい環境にし、効果的におかしみを伝達する表現であり、「マエフリ」は後続する発話の内容などをある程度具体的に予測させたり制限することで、「ボケ」の表現におけるおかしみの構造を、より精度を高めて効果的に伝達する表現であることがわかった。

### 2.2.2 安部(2005a)「ボケ」に関して

続いて安部(2005a)では、このフリとの対応関係において、まず「ボケ」の質的特徴の分類を試みた。結果、ボケにはマエフリの有無という観点から「予測を利用するボケ」と「予測を利用しないボケ」に大別することができた。前者はいわゆる予測はずしを実現するもので、おかしみの図の概念Aにあたるものを、実際のボケの発話以前に設定するものである。予測を利用するボケは、マエフリがマーカーとなって、次の発話にボケが出現するという、ボケの場所をも示す種類のもので、従来の漫才では常套的に使用される展開である。一方で「予測を利用しないボケ」は、明らかなマエフリが存在せず、したがって次にボケの発話がかかることも示されないので、意表をつかれたようなボケとなる。この種類のボケは、ボケの発話によってはじめておかしみの図の諸要素が判明する。

また安部(2005a)では、質的特徴のほかに、ボケの現出型についても考察し、①単独型、②列挙型、③連鎖型、④点在型の4種類があることを確認した。列挙型や連鎖型などについては、おかしみの図において、ひとつの概念Aに対して複数の概念Bが提示されることがあるということを確認し、畳み掛けることによっておかしみの増幅を図ったり、ひとつの箇所におかしみを感じさせる表現を集中的に連ねようとする表現主体の意図も読み取れた。列挙型は、ある共通の条件の下での、概念Bに相当するものを複数提示するもので、連鎖型は複数提示という点では列挙型と同型だが、先行するボケの発話がマエフリの機能をも担って次に提示されるボケを呼び出している点で配列に必然性が生じるのでこれを区別して連鎖型とした。点在型は一度発話されたボケが、後続する発話の別の共通の条件下で再度提示されるもので、テキスト中である程度の間隔があく場合が多いので点在型とした。

### 2.2.3 安部(2005b)「ツッコミ」に関して

次に、安部(2005b)では「ツッコミ」<sup>(9)</sup>に関して考察を行った。ここではツッコミがおかしみの図の伝達上、どのような機能を有しているのかという観点から、2種7種類の分類を試みた。

まず「ツッコミ」が、ボケによって完成したおかしみの図の諸要素を内容的に批判しているか否か、つまりなんらかの情報を付加している発話か否かという観点で「注意喚起するもの」(マー

カーとしての機能が主なもの。情報非付加)と「内容的に踏み込むもの」(情報付加)の2種に大別した。

前者「注意喚起するもの」には、①否定型、②オウム返し型、③沈黙型、がある。①否定型というのは、「おーい!」「コラー!」「やかましい!」などといった漫才においては形式化した発話が発話のボケの存在を際立たせる。②オウム返し型は「(概念B)って!」とボケの発話を反復、③沈黙型は「……」<sup>(10)</sup>と沈黙することでボケに対する否認の意思表示を行っている。そのどれにも共通するのは、実質的には「いま変なことを言った」という注意喚起(マーカー)の機能が主であるということなので、これらを「注意喚起するもの」としてまとめた。

後者の「内容的に踏み込むもの」には、④訂正型、⑤意味指摘型、⑥比喻型、⑦否定的感想型の4種がある。④訂正型というのは、概念Bをさし「それは(概念A)だよ!」と本来その文脈に来るべき内容に訂正する。⑤意味指摘型とは、ボケの発話を肯定したときに生まれる、文脈的に新しい意味に触れたもので、「だとしたら、～」の型におさめることができる。たとえば、【横山やすし・西川きよし】では、きよしが中卒であることをやすしがバカにした場面で、きよし「じゃあ君どこ出てるの」と問うと、やすしは「義務教育やないかい!」と返す。これを受けてきよしは「一緒やろ!」というツッコミをするわけであるが、これは、「義務教育やないかい!」を肯定したとき、「だとしたら、(オレと)一緒やろ!」という意味が生成されているからである。このようにボケの発話を肯定したときに生まれる新しい意味を指摘するものが意味指摘型である。⑥比喻型というのは、新しい意味に触れるという点では意味指摘型と似ているが、表現に比喻の原理が働いているもので、「だとしたら、～みたいだ」、「○○じゃないんだから」の型におさめることができるので比喻型と呼称した。⑦否定的感想型というのは、発話が形式化して実質の意味をあまり伴わない①否定型とは違い、意味的に踏み込んだ否定的な感想を述べたり、発話内容ではなく発話者(相手)を非難するもので、観客の気持ちの代弁や常識的批判になることが多い。

以上がツッコミの7類型である。基本的にはこの7類型であるが、実際の漫才では複数のタイプの複合形ともいえるものが現出することもある。

ここまで、「フリ」「ボケ」「ツッコミ」に関するこれまでの考察の結果を簡略に示したが、ここに挙げなかった先行研究に関(2005)がある。これはおかしみの図を発話機能・発話内容・言語形式という発話のレベルごとに修正・整理を行った点で画期的な研究であるが、本稿では主に発話内容に関する考察を行うので今回は詳細を控えたい。

### 3. 分 析

先行研究で概観した「フリ」「ボケ」「ツッコミ」を踏まえて、それらが実際の漫才でいかにおかしみの図の伝達をしているのか、ここでは【ダウンタウン】「誘拐」を例に必要な箇所を抜粋して

段階的に把握していく。以下、用例における下線部は「フリ」、囲み部分は「ボケ」、波線は「ツッコミ」とした。

### 3.1 冒頭 01松本～10浜田

#### 例1) 【ダウンタウン】 誘拐

- 01 松本：最近物騒で、一番目につく事件いうたら誘拐ですよ  
 02 浜田：まあね、質悪いですよあんなもん、ちっちゃい子連れてってね、  
 03 松本：ねえ  
 04 浜田：あとで電話しよんねん、あの、身代金取りに。あれ一番質悪い。  
 05 松本：（電話とるしぐさ）「もしもし」  
 06 浜田：（電話とるしぐさ）「あ、もしもし」  
 07 松本：「身代金とる」  
 08 浜田：なんやねん！  
 09 松本：……  
 10 浜田：ストレートすぎるじゃろが！ 最初に言うことあるやろが、よう考えてみい。いきなり身代金とる、はないやろ

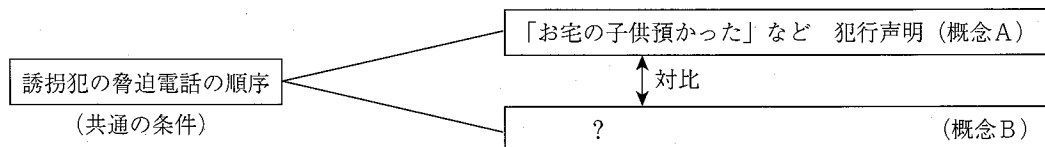
#### 《第一段階 フリ》

まず、上の用例で01松本から04浜田の発話がどのような働きを担っているのか考える。フリの種類としてはこの部分はスジフリで、いまから誘拐の話、とくに誘拐犯が脅迫電話をする、という話題について会話をする、ということが宣言される。スジフリが呼び出すフレームとしては、「誘拐フレーム」、さらには「誘拐犯フレーム」で、呼び出される情報は具体的にいえば「誘拐には、被害者と加害者と被害者の家族がいる」、「誘拐犯は脅迫電話をする」、「誘拐犯は自分の名前を明かさない、居場所を教えない」、といったところであろうか。この段階で、フレームが活性化されることにより、すでに概念Aに相当するものがいくつか導出されることになるので、ボケ（概念B）を導出しやすい環境になっている。

また、05松本、06浜田の発話は、実際の脅迫電話のやりとりが再現されることで、先に示された大きな話題提供から、誘拐犯の脅迫電話について、という話題に深化しているので、「誘拐犯の脅迫電話フレーム」を呼び出すスジフリであるとともに、「もしもし」に続く発話がある程度予測させるのでマエフリの機能も担う。誘拐犯の脅迫電話フレームで呼び出される情報例としては、常識的に判断して「脅迫電話では、犯行声明、身代金要求、受け渡し方法、受け渡し場所指示、子どもの生存確認、逆探知や警察への通報の禁止などのやりとりが展開される」などといったことであろう。また、かわされる会話の順番もこのような順でいくのが常套であると思われる。表現主体（演者）はこのフリの段階で、これらの情報が理解主体（観客）に喚起されるであろう、

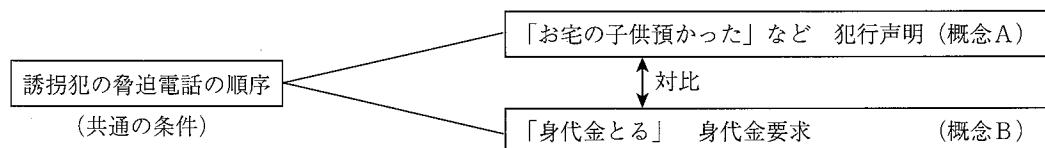
という目算を立てて話題を展開していく。

この時点で、07松本のボケが提示される前に、出揃っているおかしみの図の諸要素は以下の通りである<sup>(11)</sup>。



### 《第二段階 ボケ》

第一段階までに共通の条件、概念Aが設定され、第二段階で07松本のボケで概念Bを設定、ここではじめておかしみの図が完成する。ボケはマエフリがあるので「予測をはずすボケ」で、現出型は単独型である。

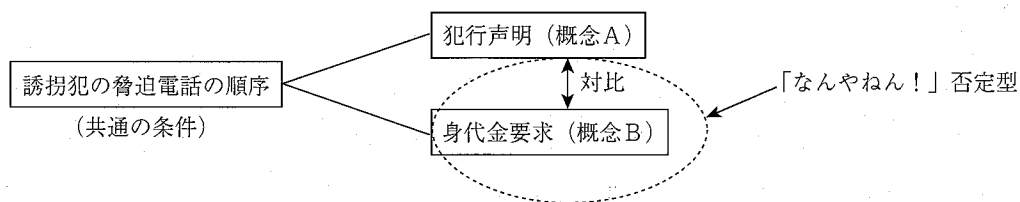


ここで、唐突に「身代金とる」という発話がボケとして成立するのは、スジフリで提示された誘拐犯フレームによって、概念Aに「誘拐犯は最初に犯行声明をするものである」という情報が入っていることが条件となる。

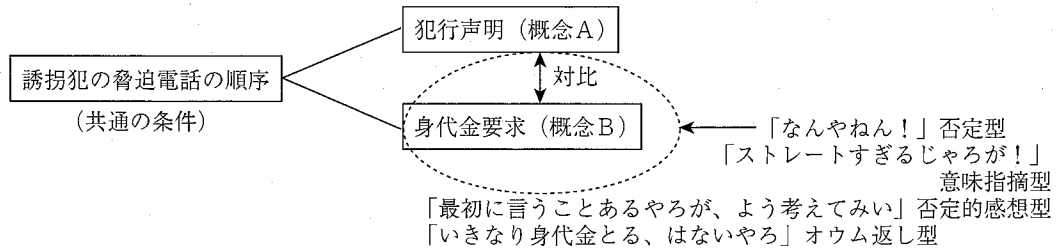
また、次に重要になってくるのが、おかしみの図を効果的に伝達するツッコミである。

### 《第三段階 ツッコミ、マエフリ》

08浜田、10浜田はともにツッコミである。08浜田に関しては「なんやねん！」という形式化したフレーズで否定型に属するものであろう。上記のようにボケまでの段階でおかしみの図の存在に気づかない理解主体（観客）がいたとしても、この発話によって図の存在を認識するように仕組まれているといえるだろう。



また、後続する10浜田は、さらにツッコミの手をゆるめず畳み掛ける。



08浜田の「なんやねん！」に続き、意味指摘型「ストレートすぎるじゃろが！」、否定的感想型「最初に言うことあるやろが、よう考えてみい」、オウム返し型と否定的感想型の複合形「いきなり身代金とる、はないやろ」<sup>(12)</sup>と続く。ツッコミがパターンを変え列挙されている点が興味深い。このようにツッコミの言語量が多いのは、ボケの大きさを物語るとともに、そのボケによって完成したおかしみの図をいろんな角度から吟味してみせることで、理解主体（観客）に伝達しようという表現主体（演者）の意図があるだろう。

また、「最初に言うことあるやろが、よう考えてみい」は、概念Aを示唆するとともに、次の発話で「最初に言うこと」が言われるであろう、という予測を働かせるためマエフリの機能も担っている。つまり「ツッコミ」の流れの中ですでに次のボケのための「マエフリ」が行われているのである。漫才はこうした「フリ」「ボケ」「ツッコミ」という流れが会話のなかで巧妙に仕掛けられたテキストである。

### 3.2 11松本～16浜田

続く会話においても上での三段階による作業を続けると、構造、展開はほぼ似たようなものであることがわかる。

例2)

11 松本：（電話）「もしもし」

12 浜田：（電話）「はい」

13 松本：「お前とこになあ、小学校2年生の息子おるやろ」

14 浜田：「い、いますけど」

15 松本：「うちには6年生がおるんや」（電話をきるしぐさ）

16 浜田：なにを言うとるんや！ お前とこ何年生おってもかめへんねん、そんなもんは！ 聞きたないがな！ 誘拐犯やろ！ うちは何年生の子がおる、お前とこは関係ないがな！ 大事なこと言いな

《第一段階 フリ》では、13松本及び14浜田は「息子の話題」へ会話を導くマエフリであり、次に「預かった」（概念A）を予想させる。《第二段階 ボケ》は、15松本「うちには6年生がおるんや」は、予測をはずす単独型のボケで、冒頭のスジフリで呼び出された誘拐犯フレームの情報

のうち、「誘拐犯はプライベートなことを話さない」が背景知識としておかしみの図の理解に欠かせない。《第三段階 ツッコミ、マエフリ》では、16浜田の発話とその機能を担う。「なにを言うとりんや！」という否定型がまず提示され、「お前とこ何年生おってもかめへんねん、そんなもんは！」「聞きたないがな！」「誘拐犯やろ！」と否定的感想型が続き、次に「うちは何年生の子がおる、お前とこ関係ないがな！」という否定的感想型とオウム返し型の複合形、そして最後に「大事なこと言いな」が「預かった」という内容を言わせるためのマエフリになっている。

### 3.3 17松本～32浜田

こうした作業をある程度の分量続けていくと、各発話は以下のような機能を担いながら展開されていることがわかる。

#### 例3)

- 17 松本：（電話）「お前とこの息子な、オレとこで預かってんねん」  
 18 浜田：（電話）「え！」  
 19 松本：「預かってんねん！」  
 20 浜田：「いや！」  
 21 松本：「驚くことあらへん、あんたが朝預けてっ行ってん」  
     （電話をきるしぐさ）  
 22 浜田：なにを言うてんねん！  
 23 松本：……  
 24 浜田：誘拐犯ならナンボととて言わな。な？ 預けていくわけあらへん、近所のおばはんやないんやから。ナンボ欲しいねん！
- スジフリ、マエフリ
- ボケ：予測はずし 単独  
ツッコミ：否定的感想
- ツッコミ：訂正型、否定的感想型、比喻型 マエフリ「ナンボ欲しいねん」が後続発話の呼び水に

#### 例4)

- 25 松本：うんうん。（電話）「あもしもし、あんな、身代金持って来い」  
 26 浜田：（電話）「身代金ですか」  
 27 松本：「うち2丁目の松本やけど」  
 28 浜田：名前言うてどないするねん！ おるとこ言うてどうすんの！ そんなこと言ったらしゃーないでしょ！ 遠いと言えよ！ 普通遠いとこやろ！
- スジフリ
- ボケ：予測を利用しない 単独 <背景知識>誘拐犯は居場所、  
名前は明かさない

ツッコミ：否定的感想、訂正 マエフリ 「遠いと言え」が後続発話の呼び水に

#### 例5)

- 29 松本：（電話）「あ、もしもし」  
 30 浜田：（電話）「はい」  
 31 松本：「あの一、チェコスロバキアの……」  
 32 浜田：思いつきでしゃべんな。なあ。遠すぎるやないか！ お前来（く）んのか、チェコスロバ
- ボケ：予測はずし 単独



キアまで。あいだ取れ！ 家とチェコスロバキアの。

~~~~~  
ツッコミ：否定的感想、意味指摘 マエフリ

### 3.4 分析結果

紙面の都合上、漫才一篇すべてに行った作業をここに挙げることはできないが、このような作業を続けた結果、漫才一篇（3分57秒、発話総数94）のうち、おかしみの図が読み取れた箇所（ボケと認定できた箇所）が16であった。

フリは19箇所、スジフリ8、マエフリ11であった。（ひとつの発話に両方の機能があった場合は、どちらにも計算）。

ボケに関しては16箇所のうち、単独現出型12で、そのうち予測をはずすものが7、予測を利用しないもの（意表をつくもの）が5で、そのほかは連鎖型が3、点在型が1であった。

ツッコミは29箇所、内訳は否定型2、オウム返し型1、沈黙型2、訂正型2、意味指摘型5、比喻型1、否定的感想型が16であった。

なおこれらの数字は機能別にカウントしたもので、発話の数ではないことをことわっておく。

こうした作業の結果から、このテキストに関して言えることは、まずこのコンビは単独現出型が多いことから、ひとつのフリに対してひとつのボケ、というのが基本形であり、たまに予測を利用しないボケ（意表をつくボケ）を言う（16のうち5）。つまりスジフリを活用して無駄なくボケの発話を展開し、人を食ったような印象を与えるものもある、といくことである。また、ツッコミのバリエーションが多く、ひとつのボケに複数のパターンのツッコミが提示されることが多い。事実すべてのボケで笑いが起こっていることをかんがみれば、こうしたツッコミのバリエーションが、おかしみの図の伝達に貢献し、おかしみ実現の精度を上げているといっていだろう。また、ツッコミには否定的感想型のものが多いというのも注目すべきことであろう。

## 4 まとめ

ここまで、ある程度長い用例を用いて、「フリ」「ボケ」「ツッコミ」という機能が、漫才のなかでいかに有機的に作用し、おかしみの図の完成・伝達に寄与しているかを確認した。このことにより、おかしみの図の有効性も確かめることができたと思う。

今後は、分析作業の精度をさらに高め、こうした作業をほかのテキストにおいても試し、分析するテキストの総数を増やして、そのコンビの文体（芸風）をつかむ足がかりとし、さらに各テキストを比較、検討することで、ことばと笑いの関係についてさらなる探求を深めたいと考えている。

## 注

- (1) たとえば中村平治 (1996) では、笑いの技巧に「繰り返し」(他の発言をまねる、音をそろえる、ものまねをする)、「脱線」(期待をはずす、緊張をほぐす、攻撃をかわす、順序を逆にする、等)などを挙げているが、これらは発話行為自体を論じているものであって、言語によるおかしみの構造的把握には欠けている。
- (2) 可能性がある、と書いたのは、「異なる二項の対比」が「異質である」と感じられた場合、それはおかしみにも恐怖にもなり得るからである。中村 (2002) では、これら「おかしみ」や「恐怖」の上位概念としてまず「驚き」がある、と指摘されている。
- (3) 小泉 (1997) の図を参考とした。小泉 (1997) におけるジョークの図式でいうところの「形」を「共通の条件」、「上位項」を「概念A」、「下位項」を「概念B」、「転移」を「対比」と呼称した。これは、必ずしも「上位」から「下位」への転移だけではないこと、また転移という動的な要素ではなく、対比そのものにおかしみの要因があると考えたことからである。
- (4) 実際には台本の作者と演者が違う場合も考えられるが、どこまでが作者の台本かを見極めるのが困難なため、実際に発話をした演者を表現主体とする。
- (5) 先行研究では、金水 (1992) において「ボケ」と「ツッコミ」という用語が採りあげられている。またこれらの漫才用語が市民権を得て定着したのは、澤田 (1977, pp126~127) によれば、コント55号が活躍した昭和40年代後半あたりかららしい。
- (6) 本稿では実際の発話と、そこから読み取れる概念(発話意図)を分けて考察しているため、実際の発話が概念を設定しているものを「設定」とし、次の発話・概念を導き出す役割をしている発話を、「導出」の役割を担っているものとしている。
- (7) 「おかしみの構造図を完成させる表現」としたのは、実際には「ボケ」そのものがおかしみを実現しているのではなく、「ボケ」によっておかしみの図が完成し、結果としておかしみが実現する、という立場からである。
- (8) フレーム理論とは、複数の概念が構造を持って結びついているとする理論。スキーマとよばれることもある。たとえば「家」フレームといえば、家という概念に内包されるスロット(変項)として、戸、窓、台所、居間、風呂、エアコン、などが活性化される(金水・今仁 (2000) 参照)。
- (9) ツッコミやボケを、その機能自体を担った演者、またはその役割とする立場もあるが、実際の資料では、いわゆるボケを担った演者がツッコミをしている箇所も多々あり、本稿ではあくまでボケ、ボケ・ツッコミなどは部分的な機能、という立場をとった。
- (10) ここでいう沈黙「.....」は、実際の公演を計測し、1秒以上の間があったもの。
- (11) 分析の方法として、まずボケを認定したうえでフリ、ツッコミを認定していく手順をとっているのも、共通の条件、概念Aなどはボケからさかのぼって認定している。
- (12) オウム返し型は、ボケの発話をそのまま繰り返すものであるが、「いきなり～ないやろ」のように、否定的感想型と複合で現出することが多い。

## 資料

- 【ダウンタウン】「誘拐」(1996)『ダウンタウンのガキの使いやあらへんで 傑作漫才全集1』VAP(ビデオ)  
 【横山やすし・西川きよし】(1996)『やすきよ漫才傑作選』コロムビア(CD)

## 参考文献

- 秋田實 (1972) 『笑いの創造—日常生活における笑いと漫才の表現』日本実業出版社  
 安部達雄 (2004) 「笑いとは—漫才における「フリ」のレトリック—」『文体論研究』第50号 日本文体論学会  
 ——— (2005a) 「漫才における「ツッコミ」の類型とその表現効果」『国語学 研究と資料』第28号

- (2005b) 「漫才における「ボケ」の質的特徴と形態的特徴」『早稲田日本語研究』第13号
- 石黒圭 (2001) 「予測と笑い —予測をはずすレトリック—」『表現研究』第73号 表現学会
- 井山弘幸 (2005) 『お笑い進化論』青弓社
- 金水敏 (1992) 「ボケとツッコミ—語用論による漫才の分析—」『上方の文化 上方ことばの今昔』和泉書院
- 金水敏・今仁生美 (2000) 『意味と文脈 現代言語学入門4』岩波書店
- ケストラー A (1983) 『ホロン革命』(田中三彦・吉岡佳子訳:原著1978) 工作舎
- 小泉保 (1997) 『ジョークとレトリックの語用論』大修館書店
- 澤田隆治 (1977) 『私説コメディアン史』白水社
- ショーベンハウエル A (1972) 『ショーベンハウアー全集 2』(斎藤忍随ほか訳:原著1966) 白水社
- 関綾子 (2004) 「漫才における『おかしみの質』の異なりとその生成過程 —コンビの関係性の決定要素—」『笑い学研究』 No.11
- (2005) 「漫才の笑い —ズレの構造と体系—」『表現と文体』明治書院
- 中村明 (2002) 『文章読本 笑いのセンス』岩波書店
- 中村平治 (1996) 「笑いの技巧」『福岡大学人文論集』28 (1) 福岡大学総合研究所
- 野村雅昭 (2000) 『落語の話術』平凡社
- 橋内武 (1983) 「漫才という言語行動」『ノートルダム清心女子大学紀要 国語・国文学編』7-1
- 松澤和光 (2003) 「コンピューターにことば遊びをさせるには」『言語』32 (2)